# 秋風詩文集

へ 5
1867
2

# 秋風庵月化著

## 秋風斧文集

### 芭蕉翁像畫賞

文八代の衰を挽し道天下乃溺を救ふ
韓退之乃好小蘇文忠書ゆとなむ西行
と申ひ〻是實を存せるゝ有り風體を
ふまをとゝ〻めゝ宗祇歌大槩の説
なり檀林の斧を入〻西風の[illegible]を伐再
きゝ八此翁なるゝ歟此翁なる哉

奈藤文庫

上田三段

相ともに友とちかひてこの庵の夕花
の料にかいくれて乃田をうゑまし
法しに終よこさんはらゆをうこうこうゆさ
朱帯して腰をおるれむつらしけゆく
て月毎よ五斗米のあるをたのみまき
淵明の秋を待しふ岩よ醉んうらめやや



手うゆをハ成ぬ所うそれるとやうのほうきに
耕粧の時をとうせる必す岩よ
ゑも乃うゑ醉てうむ為田よて

筑紫題林集序

大伴の乃長うふたくし此国ハ仇ようる
ゑうの城うとまうめてうゑうゆして
南長此葉のなうゆ之の古よ花ハんとき夢
ゑうしそれのうゑハ或を開屋をうまへて往よ

人ゝ名ゞ[illegible]めあ武ハ城を築くてみちよの
水城なと呼なる皆賊を防んの備ふ[illegible]く
らうはしき世のなるそしにたりも今やそ跡
ともも昇の住ふて斯も昇平の化乃及る
を作まくも拾あるゆたのれさてそて文雅
乃徒昇も千里を糧をつまる西の海路乃
新桃丸そやとつきなる浦浪もえ川た
嵯ゝ行ものなゝろも海を渡れる風流
ゝいそむハ文明を宗祇おゝたのり幽法公ハ
天ゝ乃来ゝ世里此外ゝもあ名れゝ此ふと



茅を吉くゝ紀行ゝ世の人もにすきあり志ハ
あきゝいゝと俳歌のきゝなるゝもとゝあり
と中文化のとゝゝ春坡とゝるすきやの九つ
乃国人ゝ此きめゝる四季よわゝゆく和やら
なゝるゝ乃歌ゝてを拾て一冊ゝ成志り
関人是ゝ五ゝ世の芳を伝れゝ又ゝゝろ
きゝ本い遠ゝる志ゝ[illegible]ゝ雨

## 夷相辞

仲屋の裏北方より一井あり其傍より一丈と
乃桐の木とてり直幹亭々と数十尺園に
こ十すぢも繁きるかなへ植ん時を考ふ
迄ハせそうりも絶てゆるむ其葉して
佳とやんなるも削らるる夏の伐て翠緑も
せすさく呉人のごに焼せく焦尾の名をも
弱めすまいて大和琴作ゆ夢より来らん
姫ゆも待さしゆハ只鶏啼なる塀の内と
そかさうち吟し遠古翁の他と変られすす



ぶくまのしを或ハ人来ゆくるき林うれ
販きたさく得ゆたるのたてゆなてうきる
事乃あるよ之後うにたゆしき名つき
さうちこうすゆね花咲てあく清明の日を
告一葉ゆくハ天下より秋うとうくるを
いてひんなう絶さめやとうけるもいらへ
つるふさくハ菴主ハ法木の性ようとく
知すよ杉の類ひて根うゆ伐てハ再ひ
生ねそうきてハ此すしてまゆいる蘖
すゆと伸出て後て親木より勝れるを

其せをたんまと楽しくすやなくせをよ設つ
二斗米をも代るそうの料をさ出寳く頼て
丁くと言さすくうおもうぬし其本しく
文机の具作るや又火桶のくしひうややしハ
まさにのうくれ出きむすめ嫁うとくく乃
調度めくもの造らんの料うやく国へそ答を
拵うくくうく笑みつなの色ハ殿を挽く城
業くす桐の薬弱なるちくも入きすて
こくらの殿を挽くく妻みれにを糊するあ外
むつくけれる寳ハ国くうを刷ゆさ



とくく土除うも殺しとふさたく柿の油布
拂ふくいぬ嗚呼非情のおなのれをいくとし
ひさんに見駒さりるひものをせめくくさき罷
ゆくもるさて終ハ泥土よ身を果さする
ひくうをくと緊うたけうせつるを悔さつり
しる風友の居りうをくらく殿とて去下
ゆいやくのこのたうちうめ泣うゆくれて
支郎よくても安石庸楽をそしめ国人よ
国めるを事くるくハ其人くの傳ゆくるせり
さるくも女のそけるをく作をる笛よハ秋の

鹿もうゐ来るとゝ人罪深おやうなめを
役のゝ角や数待法師なれ行歩と投げ
よゝせゝと閉けて其縁を引きても悲皆
成佛乃拾ひ人洩るまゝなと待あるゝ
歩くゝ日も早暮く東山のいつれる月の
いつるゝかりて物にさはすゝちはゝ乃
猪を照さとうちあまてかゝるいひつれ
ふゝ案れなゝおはさむ秋の月



伊豫日記序

日記といふもの表坡もゝろみんとするよ
りゝさあきとやとゝゆうちゝ河ゝゝわてい者に
つけ西のほけ旅宿の秋乃ねゝさ見るも
ゆも感あれそ日西ゝゝいるゝ且なくま
述つゝかさのたゝゝせゝに関ゝる人と毎り
いつゝ日記ゝゝ無しあるをめゝも百馴く
すゝろ題せるとゝきゝを御書所乃土佐
てゝありゝんゝ對ゝく歩けるやとおし
ゝゝひよ思ん人もあゝそかゝけゝゝく頭

よ仔まへよりにあんとする小紀氏のこゝ路へ含
中よりハ海賊の事あまた所よ起りて海上を
ふとせのほよくみるくすし勝つ室心をし里
せられたることの船路ぞさるおそろしきよ
憂ひも聞へ侍りふききゝるにも浪風やすからぬ
おそらくつくゝるところもなん此一事のこと
よおもわれといひそむかしよおもへ太平乃世の民よ
生れあひたるぞなりけるそれハ百日ゆく濱
つたひとても人ハ道を譲りける里は山を穢さん
よも枕をたかうして臥へし笠一蓋杖一本にて



ここちもたらしそ四海皆こと〴〵く掌握せられ此
時ぞむかへりともしけるまことに君が代なりけるを

跋筆此事思ひよりて消息

さらひ賜わりし此書中にハ侯人ハ當時西の
國よりく乃候て伊豫此構堂と我が友あつ里
先以往き一ハ額ゟ衛そめのほくの志を中
謝候得共過當の附會よ恥入候それはさりながら

くら流有り候ハ楽中多の法ある人のもと
よりそなさひよ五元集を見しるわしき
事ひとつと思ひ作り侘を入るの禁まして
この流を指さしく其時乃呼家と成侯は
清く世骨氣老成骨ふに彷彿たりと世に
ゆり作ひしも程なく物故と聞候也うの
高弟流の以平秋を因そなるもれ多者猶
尾を敷き作るゆ来りしてなきしのこれ
ゆりを判をもひ新波は乃人を句をのは
あしを詩を今ひ候三十多の俳業ハ高る所

ある門生のみまく梓を鏤め候是知命を
の作ていまく古撰の調ハゆるぬ也す作を
同流乃流等ハられしゆてとゆそ中候き
をとハ一株のそせを菜れ陰を仰よて学ひ
作も法ゆるゆる何流角流といひなくそせ
しよりおのつくる水波の流あゆく交ゆく
杉稲星候りくて其のち蕉門と唱へ作人く
ゆも訪を作るゆしくそつはゆりもりを志
られ作ハ此十年作ゆるもなる人く作ゆるに
樣老ハ茅ゆ紙一乃蕉つ名望の人と認作

もとより家事を顧みる暇なくして浮世は
月雪の外実なるものとて閑居あら
ハ老くやがて家業怠れ精しきに到らんとす
貴しく作我等も退隠のそしめハそれ等
しき素志よりく作ひしそかすも孫おと
ちゆらの上をとう身をおくる事いてまね
るたのみ年娘と悼める中より述作をそ
いそすかるうれしきよりそれ作ちもそれんか
改の出まゆく朝より米銭の活計より苦むを
夕より花鳥の雅事を楽み作いんとすれ先

又打ちゆきてるる有様より風ハも妨られ作
奥に又寂渕のまい家ハ自恣世ゆ調ま
物ハす一枝をそて知せわとく大江九
世せられ作此人歌逸凡なるす高壽を保
ちく閑の楽ま佳辞を残されぬ是も及ハ
ざるに幸ふ幸を雖せそ知やうなるまま述
ゆるふ等しく作いるこ受の徳を望ま
ゆうさんや昔歌人の中に隆信朝臣宮ま家臣
一つひの梅あゆしもひとわハ世ゆかつらひく
公務行わ紀をまそすけて寂蓮法師の名

あるうちうちとも左右なくいつの年のうちにて
陰法師至さやく死せずして道の駅をこれすす
との歌者しとう承つて後悔入仕ることなくも
此人々の述懐更よ人乃うとも如何ほどす仕業
こゝ〳〵六十三翁こして且老さゆ日暮途遠し
以来の語言も日々衰へ行くへしと悲しく仕
白管の長き根なることれ拙きも畏露常
信せる実情うとくもし語ることみてなし
悔ゝとくこなること移ひ入仕穴賢
文化巳巳年



木綿山つと

豊後国乃由布山のことあゆし山の裾野に
ゆるゆひんうし方一様に佐人乃画ひ添あゆ
其左右すゝ笠生ひてそうゆ中よ出るも
いうりそこけ一寸ばかりこ其茎
其花形その色濃きあり薄よいゆ似うゆ
ゆ似ゆゆ似ゆるものをいへゆこそまこと
はかまつそなゆ一むゝ先ゝなゝ見

あやめのうるはしきことをたとへたるこの山丹
うきまるまでにうくるもの

西行てのいへにもとめたる杜若

といひたせるを豊臣秀吉聞給ひ中納言加へし
二十余年のむかしなりしを母上の草庵
第を好給ふまひらの頼盛の此ものをあく給ひ
て彼あるを行給ふ人の頼盛こを拾乃際を
彦〳〵宮ち其拾き土をくつけ給ひてこれを
根こしの事ねんごろにあつらへ給ふ
植たまひてこれ乃ことく愛せられ給ふ



ふく鈴出されたる事こゝ乃ふ葉そうろう
蕃りぬされい所異なりさて扨土のあそやや
いろくらむの咲まさるなりけるひけるも
て来こ輪まくく吹出るを居なりうて
興しぬ

ちひさくに咲るあやめあるかな

筑紫琴ひく法案頌

八朔坊うつくしき琴の音をあそ

ちくせの人々のうて其者をゑらばるなるべし
や爪休ませ又は沖を眺るに瑞の浦風そ
いつもさうあり筆人乃國をいとうす 頌
ある字器百乃為人をとうとう道のこと葉を
述させかくてうち過る鼓ら瀧いと山川の鳴る
よりとたうふ周出豊国なるゆゑ武蔵
ちろくもりんゆるるくるうんを城もまる位と見
てしうは此續きれと巻いつゆくゆしとあ
さるるるるは此坊のまるこ脱ま身の学来お
さるいつたるるそまさくるるぬ人のふいこを



なるるまの心を得るをまく秋風菴ら跋とす

八朔坊稱夷柏阿波人其人目眇且聾故戯及此

梅翁乃木像を作て毒ま送る寄
京因の翁の門弟なる西国下迄ら弾ぜ小家
住める貝田の産なり風骨等よる師ま背す彩
笑いこと法集ま送るまた又別ま技藝の如
いのうく東都の超るれ日小厚くて侯の頑眄
を宗郎ものなるるは述すそそ

刀法をこゝにあらはす師乃徳を追慕して
まつゝ雕刻せる翁の肖像の面影をゆく
末なくも我庵中に迎へ置きつゝ年毎
乃文月ゆたかなる供の食のこゝろなりし
にまつゝみ五彩堂のあるゝ此像ほまなしさあ
らそ一字の堂をいとなゝ安んゝ置きつゝせむ
とをいるまつて此像の傳燈を挑け来るれ
何宗ふるむあまそ法たゝそふつゝく如去の
教をも盡さゝるの田舎なゝまゝさる
まくも在庵こゝ十餘年乃名殘も惜み侍

四十九

きてゝもあゝ此はまれの古々経波はちあれを
蕭のゝ在れ夢のゝ生さゝれゝ此蕭あ
ゝのゝんもゝゝをすゝるゝゝあゝゝ霊
魂をゝ幽老のゝゝゝゝるゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
百歩の見遠ゝの恭ら

花乃山踏

四花江南所無世於一枝折盗〻筆者
伊天永紅葉例伐一枝者可罰一指
壽永三年

とあれハ哉われの文ハ和歌の筆にて須磨寺
北什物にハ世人皆知ること是をもて石刻
せる扇の半面を書る詞
文化年中あるまち乃ひみとり所ふれ山ふせる



人の中にひとり北法師ありて乃櫻
手折〻いつ〻ふるを山めくり乃
書人見咎めて〻ちふを捕て多ひるの某
の院通行く所の作法りひてんとす時よ
四條ふ〻ふるもめるとも中何やん
御〻ふすと見れそ
梅ハ折さらハ捨る命哉
とあるに接せる人〻ふまりの稱嘆し少も
疑ハ其〻ひ〻乃枝〻ハ折〻与人ハ知ま
さんとあく響し〻て〻せめ〻偽〻ある中ま

即ぬのそんてゝ風流の極りとかるむしめき
く物語の中にあるみやひとゝ今の世にもゝ蘭
つゝまし紙とゝ中に一世代中より或人すゝ
出ゝ腰なるあふまつひきゝ人ゝ
ゝ〳〵其句の故ゝ扇面の石板ゝ
是おゝゝをゝゝ持合せゝゝゝゝゝゝゝ
四ゝゝ代方り件の所〳〵ゝ探ゝゝゝゝ
あゝゝゝる変ゝ省の俤ゝ幽伝ゝ筆の孝ふ
すゝゝゝゝ詞のゝ筆ゝ乃ゝゝゝ
梅ゝゝ代制れゝ書ゝハ櫻の事ゝゝて

五十

梅ゝゝあゝゝす既ゝ江戸の浦十番ゝゝゝ木
の梅ゝ出ゝゝゝゝゝ後句のゝゝれゝゝ世人
梅ゝのゝゝゝゝゝゝゝ代ゝハ世ゝ江ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの僧ゝゝゝゝゝ得ゝ
ゝゝゝの作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝて益ゝゝ唯世俗のゝゝゝゝゝゝ
志度の浦乃玉ゝゝゝ漁田乃梅の乙姫大江
山の鬼茸ハ皆我堂のゝゝ得ゝゝゝ

## 隈川年魚諱

豊國のみちのくちなる日田の縣より隈川と唱る
ところにて此川の隈日のくま星の
隈と號けつる三丁なる其流山乃
此川中ほどにて[illegible]むと
流をる隈ゆる子戸より人家ゆ隈町の名も
あれハ[illegible]ところなるんゝ
源南の方ハ肥のくちなる國とひんゝハ
玖珠の郡との二川合流ゆ一ちにたれ
爰ゆて則底なるくちゆれを是り



住るいろくちくちゆ見る中ゆる鮎をもて食品
の美味と稱す理ゆ市島帰ゆ毛落くちゆ
家嘱事紅葉するくちにもるまくもて海士人の
手ゆく獲こる魚ハ殊ゆ人ゆくろ有るも
十三里海をもれるゆなりてもゆ失ハ得る
こと有く海なくねそうなくさゆみの強き
も知ゆくくく鵜川のかゆ史奴婆久原乃闇
ゆ濤ゆく其外答ゆくくゆ羽ゆくくゆ
まくゆるゆするゆるくゆ呉ハ乃葉ゆ内ゆ
もいわくくゆ日くくゆ肆ゆ魚を絶くゆ夏

乃登膳所君なりんはあるべきよ新しく嵐の
はしめくる身を入る比ゆりの上下五三里位ゆ
間を漕ぐるかまつるべき数十所河水を汐業と
催せそ必流をる順ふたる鱒乃口を計れる
成〳〵猫を誘ふ水あるべき行事あるべからげ
なるよ雨降るべきる後の朝日のみ面り
なのあき出てるころほひ漕ぐんとてまりるる
まめさまるまき八此時なりげの口本日れつよ
数千喉の者魚簗る漁ぬ其形ちかるちちさく
うひるれ肉高くあるりて大く逆き弁世るの

五十三

溪鯉を数ひせます敗くなのこと杜稗してうつよ
一尾の重さ八十目ゆ百目そりゆるを言通
乃翌とそうれ三四十目を加ふるを家
ふそすべきそる人うりくさになのきむし
一行なるものを見さゆしう今八なしとゆき是
更まうきそる事ども問えすそれ通あ
んを珍らのいをなりゆとてひ高貴のなほん
許を捧んまうきゆく又作ことれあるよりえ
いるみせむふたくの出るしてハ烏賊のさきな
まそひめていそる其隠せる物をそしく

殿たゝすとの方言なるハ誠に一笑すべし柿鮎
よりなるこゝる國九十あまりの郡のあゝゆなるハ
歌人乃景物ゝこゝ含せつゝ浦川ハ氣長き姫
乃尊の釣これたまへゝ故事ゝ傳ゝゆ
生澤川を風ひ物ゝ作ゝく題目ゝのゆなる
を沈里其餘の國ゝハ或ゝ白砂千ゝ銀ゆ
或ハ肉脂ゝるゝなゝに製して各物の數ゝ
筭ゝなるべゝ三ゝハあれゝ皆魚の大なる沙汰
ゝゆるゝゝひゝゆ岐阜の產をこゝいゝれらを
思ひゝきゝゝれゝ長濃地をゝゝく控し



ゝゝゝゝ方のおゝせゝゝ實此和鮒魚
ゝハけゝすゝ魚ゝゝゝゝすゝゝゝゝゝ作ら
きゝきゝあゝゝゝハ隅川の鰉をゝゝ銀口魚
中のまゝ縛すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ此魚を
たゝみゝゝゝゝゝゝゝ所のゝゝゝ試ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて肉味淡ゝゝゝ旨ゝゝハ且腸ゝハいゝゝ
此交ゝるゝ杉ゝゝる易年苻朗ゝ古も持ゝす
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ實めんハ長原のゝゝゝゝ
味も又殊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゆ
なゝゆ品ゝゝゝゝハあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よしなきものあれと世まとれさる
ちはいなくもはるされは主つ國人よ
對せん話の柄まも染み移らしく事のすさま
よしく記しそくことなむ

休俳帖

いまの世をわら庵名樹まつくしれ外閑の
こちとして行いを俳ふを事ハ又遠く東北



の方くよりも文通あり去年よりもて又ことと
因て求め来俳人の新さり頭俳ハ此道乃
業まとゆくらめいかく書ひ可申ものて候
たるて馬鈴いてつくまま春ハ古来稀也と
いる事ハ成候ら身ま宿疾あり殊ま業の
ふ因をもく佛法ひの報ふの會釋ま堪
うくく俳句を以来俳の事ハ時節の感慨り
催されて候てふくん乃動き俳句一向も可
中事ハ格別ふひくこれわり生せる苦心ハ彩
めす品錦年をを氣随まもくくく賤意を

寒ひ侍りゆゑ候得て言葉に嬉しと承
侍るも其時〻應答に及まゝ侍むらいの
段いはんゆるし下さるべくさわとゝ又案力
を得病時も御坐侍りし如くうも企て
世勢静を伺ひ候事有へく候是世代の
申ひらんとおもふ乃又もに返しまるとゝく
徳侍る或人の居候うるくものふるを
笑侍りとも敢す狂句
是風の吹せひとゝ乃寒さ哉
とゝとれあるも年に悲しまるものゝ侍



斯ゆゝ慶人の寄しき身ゆへ向来徐者の
子細を申跡侍そゝとゝ(ゝ)ゝ雅情
ゝゝ古見捨ゝ
乃されば〻しし老屋の鬱を伸しゝ
ゝゝ侍頓首
文化十二年十一月　六十九歳

いさ那乃肉を謝て
みを多中鯛いあきとも塩鮭と芭蕉の公羽

乃すせうれい同じ世の唐津なる五雲
の君より其皮肉をめくみ給ひ頒ち
鯛あり給ふて宮殿白のごとしいと美地
を櫻の名を知るまてなり花ちりしのち
其鯛さへ来らぬものとやかして調しく
さうへ侍るとり音迅く早のあとハ風味
いとうるはしなり初夏ひやや海上寒風の中まて
の獲物と今此炎熱の山家まて喫せんとハ
理とや梅雨霖霪潟うれ賜なれとなりなり
霜の日とあるへハ涼しき旨なり



明府君より御賜まて賀筵を設く
席上乃言葉
ひつくるうをとはせよし世の中にとなやるも
ひとまと齢ひまねつとろとハ獨こち打住居
さわしも時なる乳愛し嘗こまるまし
酒しく折ふしとてそそたるひて甘旨の
その等こまかれあるとやたれ・ふるむ
こここみふるはなまとも乃里ふるも

いまをさかりなる万ようの得させたまへる星の井
てゝ三夫酒のみ肴添させ給ひくれのまゝ
孫ども宮つかひして此うへの物くはへさの給を受
へしとの給ひせことをかゝりてかゝる天晴
乃ちらうとくたなかるまき脱ぎろれくのやゝ
まくわ指つるれしも使ひしまるまくく
備邦の侯家ゆゑ召せたまふまして御菓
兩品を左右の左別しての御賜ものるゆゝ
うしなる有様をうし袖なる分も給をかかて
宮廷の鮑さくく風流の佳極上れ侯者



此の侍ゝよ梁乃塵もさふ居まゝさて厨の方
よゝ器皿の新ひとゝゆ指ゝ膳ゝ筆をくまて
ゆゝ仲人のまゝふれを給仕の役なる見
孫寺うえるゆゝひなのゝゝ畳さゆれあく
ちよりかゝくをゆゝ平なるゝらう
ゝ式をうよあゆゝ或いをゆゝ膝なるハ
てうゝ乳ゝすゝゝ坐ゝ
其中にあるを見ゝハ多り髪もゝゝ皺も
伸ゝまゝ心地して猫いつまくゝもなる毛ゝ
ゝる花をいゝゝあゝゝをゝゝゝゝ歌ハ

まことに乃ひとみよりなのく笑壺のことを
催すも皆なほんいつくしの深く奢きにれ
とおもひのまゝをおそれ〳〵かしこまりて拜謝
し奉るものなり利
あえん寂の外よりも天のこんつれ
文政戊寅八月廿五日　七十二歳

諸集より芳せるをうの句を誤つるを穿鑿
朝顔乃ぢ見いの日ぢ乃ぢ山樹哉



釣狐の狂言より
ろ乃ぢ乃ぢ世寺へ向出られ何も馳走なれ
とも是乃ぢに山椒ふい茶をのみつゝ
伯蔵まういほりさま垣根蒙なく這せ
ろんとの見こみのうて新茶の時ふるとも
ろせもの乃ぢうり吉言もく趣向より作是
ろこゝろに其言語のもく用ゆへ一言も
ろゝゝもくハ一句に治なり
沼繋ろゝ中細く咲るとの書て
山るのほろくろ事奉ゆけハ文ろろ

如来の母うとて思ふとあるハ行基僧正の歌
なるべく聖者一切の衆生ハ皆我父母なり
と梵網経乃文をもてとき給ひしとも
又古今の高野山なるく父母のたまもの
忘し雑の部と関えしを見まし
他なるめとあるハ法華の中なる衆生
なるべくしてよみ調なしとの
わと一句のこと説くを説わく雑なる
て然るを細と真名字を書さるそのを
いふ解すまを ふと無理な解すとも



味ひなるべし
作向ひなるべ雁ハなるを望れ
こゝにあるハエケセテ子へメレの五音ハ
力なるかなるく留る弱未乃を示ハ薬
なるとハ切なるなるとハ
いふあさよし
垣根なる鶴雑 二月の朝なれ
東風の凍解なるに雑の雛も引連て
墻花の土なく被して抱しなる色なく餐
こゝむるまらこゝらとなるのさしなる

春の景氣をとり述てるなりさるを霧と
ちりてこそ墻根乃霧何事ぞや壽老人
林和靖の詩句を意解するに
霧まがふんむらし一奇といせの物あるは
雲乱れくれるすむらつもる葉ら故る
とゆくらめるを四霧ハ澤まこうすめと
雖しこのひ基後朝臣の失たるこ
女文字書こんハ清濁のこちめにころ
つるこゆしなるべしまて鶏と鶴とこの字
よも國字ものも書違ふへきこと



ふつとんこ恐し霜花ハ鳴三羽 鶴
是ハ又霧なるを雨と誤れり雨まこて
其情薄しこ夜の霧乃ふを思ふこと
いつをかこてこ花の字の清もあるめ
右の五章ハ句なるを難波ふこ中代人の
因ふ伝せこ集ふこ川又ふ中ものてふ
ふのに樣行しこ世乃ふ流布せこ物
斯乃如く句言こを害せるを人人ハ中お熟
の程を詳せむこ和ふ歌ふ評こ中
こゆこ情ちこ表せるこ中ふ

帳こやるへきよ九たの〜す文もとめ〜にいとひあき
らあむハ百里の路を遠しと嵐をも放ちてかやう
ありしをこうろうへしかくして常よ〜もくち
惜らかしう武日書を精となさしめてとてあるまき
くりよ行とそし〜よ見つるかしに
法いよりみちしをそめてゆしうと
まのやうやさしおもてさうろ里しを。
此とかりりうかよしくハ二首のとらめあし
くそ感慨すしなし　嘯
夕されそそ風のうそうむ川風よ



友まとハしてみる嗚くなり
川内路かハいうふしくも気ありともかしらむ
うかりる人もあれ嶽の山おろしよ
名けしられとハいのうねもめを
山おほしとは〜かう地となく押して武蔵ある
元の八り情ある佳に柳〜影
忘れしきくこうろうえまとよ申さつれ。
たちとあかりつきもあかくうちそえるへくれ
あつらの中よよてくハ誤りかくの道あり
味いれしきくあるへしうわも男女ある手習を

導くことあるを百人一首三十六歌仙なと
取あつめて杜撰せるに見ゆるハ多く書肆の
手より出られハ責るにあらねとこゝろあ
らんを顧しる葉ゝ弼る物の中より右
の類ゝ殊に昆芳ハ平生に口すさびく
皆記憶せる歌なりし写本をて不圖誤り
ゆめさめ印板せるあゝしめ毋里をとゝく
校合の後著へよに徐徐ゝ古人
物語ることあゝて泉下より眉をひそめ給へし
和歌のうへにすらかゝる疵あり給ひてとも



俳諧おいつゝをもいつゝ初んすゝきをもに
しゝあゝしゝとかねての河へさゝゝ晴く
言葉の一覧ゝゝとし昆芳ハ俳諧にも自後さい
ゝい乃ゝゝゝのゝゝす人乃ゝ人ハ思ひく改め
只一已の業より過失すゝれゝむ事をゝ怪を
ゝて老年を悔む外ゝ工夫ハなゝゆよ

七つ目安の賛

俗間より十二支の中我甲乙より七つめなり
世間にもてはやすものを賞し壽福を祈るハ
支那より来りし道家なりとて此国にも
其遺風なるよし桑乃楚濤牛を画せて
賞とする此言の七數を挙くいひ伝
こと疑

大内の御車牽るゆゑ
緣復乃資けなるを以牛の功勞あげて
計へ奉るなり
宗廟を祭るなるハ見ぬを待こと此なり



ゆゑに預ることなるも神祇の祈る
す輝敬なる親しう
隠君なるハ愛しく水上乃水を飲ひ角を
抑きくうるも端を守りて高ぶるも
皆賢士なるゆゑなり
なるハ戯を制して和順なるも人工にて軍
陣に用ゆるなるハ猛き中前なり
なるも中に妻妾あれハ輝きて含まるる思を使ま
左へ右へ進むも止るも皆人法を解してそれら
下なる酒ハ識ひのなるいなし

庭訓往来ゑもつ牛と記せり但てるとゝ後ろハ
犢の事ゑゝゝ其國ゑり四方ゑ駄まて高貴
乃屋を潤ゑゝ彼金牛罡の名而已傳れる
ゑりて勝らん
桃林の野ゑ放ゝ太平代ゑ化ゝてるまゝや
風流乃徒ゑも現ゑゝ黒牡丹の鞦ゑ白柏
花人ゑ紙ゑゝゑ思めゑゝ開けて其生質
無雜ゑゝもあらゝゝゝと思ふる
そ徳の七つ目ゑ乃ち乃牛
此ゑ乃文事を稱すゑ假名の韵たゝゝ



ゑも五音相通せり

うゝ陳山の
あゝ吟ゝゝゝの山ゑ出ゑゝ葉ゑ龍田の川
乃錦なゑけゑゝゑゝゑゝゑ散ゑる
とも又流れ来ゝるゑゝゑす兵其風情ゑゝ
せゝゝゝゝゝゝ西川のゑゝゑゝゑる紙回
法師の粉骨ゑゝて秋風吹渭水葉滿長
安ゑゝゑれる同枝なゑゝゑ古人後ゑゑ

夜嵐や明くれば木下乃紅葉　牛

とかくのいとせてゆゝしく或人のいとらく世間も
このむ枝上なるひのもりみるとゆともよさ
まさはされしとものいそすの其言をもさせて
たちふ樹下乃紅葉とんてる者の結形と同格
なりとよしと評せり其評の是非いかゝれ
思ひよりつる事の始しられと傍よういつく



富士禅定

ゆくりなく東都を起て駿河町の横ぎた
しる中秋を雲するとて西の方を遠く望
めいとゝもゝ降積をつる
名月乃雪こゝろもしゝ不書の山
とゝひ出さゝもの高根をもゝかさく見
さるゝて清光の廣大なるを對せるこゝろの
景氣を作りたんも五十余年のむかしと
なりぬこゝろみ豊国のこゝのとゝかなる雲花
ほしゝて南部姫のおもをうみ乃まねせこゝひ

てゝ世をもこゝろ〳〵いとある禪宗とゝ
登山あゆゝしゝく孤〳〵の信しゝの身驚し
信るさるにてもさゝ壮んに愛すゝ〳〵嘉むゝ
君よ回人なるまゝとゆゝしわといふるの
右を紀行編るゝゝゝゝ句の需めにるゝ送る

園扇漢

園扇八和名字ゝ波と列して数爲物ゝ
ゝゝゝ深山ゝゝゝゝ甚ゝゝめあゝゝる



世ゝゝゝ手れるゝ信人さゝゝに製作し
さゝゝの名ゝ設ゝ侍ゝ工ゝ賦ゝゝゝゝ
ゝのれゝゝ懷ひゝ述る蝶ゝゝゝるゝ
さゝゝたゝゝゝゝいやゝゝに列安ゝて愛
せゝゝ一品ゝゝゝゝゝ氏ゝ恩情の
逐ゝゝゝ頼ゝゝゝ砌ゝゝ引ゝゝ筐中ゝ
ゝゝこゝのれゝ西風ゝ怨むゝゝひゝゝ
信ゝゝゝゝ信乃宗ゝゝゝゝゝゝゝ又
捨ゝゝゝゝゝ一宗ゝ流ゝゝ秋の部ゝゝ
かゝゝゝゝ四の益ゝゝゝゝゝゝゝに

聞へぐいをないなし以てさらハ甚益ある事
をあらんよ法名句武侯ち出さくハ三軍をを指麾
しみくそ接安んし越の猛将乃小笠行光の
鉾をとり身に受て法性院の危きを救ひ
よつてせ世に兒玉黨か紋つきたる旗の風よりそ
毛一揆も吹ちるとや又さてハも汀子も桂枝と
布の袋と此物ならく和尚のごくさとやいさむ
跡有れ山の倚正坊ハ人を容るにうちあふまき
くハ必善哉の言有土俵の上よして岩井木村ホ
のゝを鎮るごとく左右よかりて必東西ゝの



法味か輕ちすよへさてもよそきしたし盡
まよしされと志ち才の名をさと望むよ貴ちら
れざく業をも近めぬさまよくも山崎の法体か身よ
揭をとりけしハ平情軀よ家へく若年ち肉祭
そ親似の調めよて是ち讃とあらんよハ世
不塩梅よやされとく又風味よく吉うち
すさき句も調し出ねハ思ひ知らし此忘り
向ひて筆ことの手すさひよなくらめとか
なりしつ獨生の友とするのそ
月ハ招よ蚊ハ追つ拂ふ宇知波知

い月十五夜月蝕

玉川ゆう月弘の詩を月を蝕するものハ月中
乃蟾蜍也といひ俚説も亦舊〳〵ハ文忠の
いへり又天狗爲月弘のうゝふ
久〳〵ぬ中なる枝をうゝすてゝ
あなうらめしの夢おゆ せう
さらませ給へ是曜兎の盧ゆゝ同し説を
とゆ給ひしゝ同ゆ此中秋ゆ其事あり大人ハ



弥情〳〵小児ハ恐怖す
注ひゝ見ゆ可ゆ詩月さま

御德頌

慶長三年戊ハ月廷衛殿下就山公ゆ九條殿下
玖山公ゆ法印玄旨の君法眼紹巴法橋
宗臺ゆ仰ゆ〳〵御法一道の宗匠を相永
貞信菊ゆ見給ひあゆ〳〵ゆ爰ゆ二百年
未月ゆ日に感んゆ〳〵も其故あゆ風月の

趣にとゆく清きも歌よもそれくよ学べる事
なのゆうき学すてハ口明雅〳〵四つとめ嬉き
筆ハ皆俳よ俳くなるべきいやしき道
とおぼえ人もあやとや賤〳〵とおもはねハこ
そむらしよりいよも雲のうゑゆめ〳〵医家
暦〳〵の御口ぶりさひ拾集にあよ〳〵下情
をもちろしめすくなるそ俳乃徳なるすや
はしくもちろくの枝葉のうへを楽するに
みつゝ行歩ろうよ但せ万ひむ業ゆゆ
者乃後健なるもてもゆゆむもとけるあを



恥〳〵止むるをとるすして慶るをなあり
序其服を調度を火数掃ハもしてハ肩尾
せぬ遊ひあり是を皆掃ハて時ゆ沙〳〵て
風雨なとに妨られ〳〵かねゝゆれ設ける
いとゝ〳〵栄をゆ〳〵あるをとられよりる
俳をひとつもあ〳〵すをを俳の俗あすや
かれそう奥山のおゝろ下鄙乃あ〳〵聖乃
ホ〳〵くもあるかゝ〳〵〳〵其中ハすを
ゆの俗〳〵うちるゝ俳ゆもやとり彩く
そめての初をもたゝをを里ふふよ杖を曳

くとて宮のまとゐする一友あり或日来りて
今天下の風流家をすべて待ハ其一分半
を得歌連哥ハ二分半も や餘るといふハ俳乃
ものたるめ中つれたるをいふと昇う
こめるしるいとまなし世中廣く大ひなるいて
う計得まき其者の程いとまをかくすれ俳も
景情の人ゝを感動せしむるこのことハいとて上中
下なわるゝ斯も幸ふ人の多ゝあるとそん
よ俗談平話何乃陋よ事らあるむ
元祿二年庚辰

七十

九州題林集序

遊ゝ東桂川の春波ゝ人の口ゝひとも
を集めゝものゝ秋風莽ゝ幸熟ゆ
ゝハ文化丁卯の年ハなゝゝみ弗水九月
欲共ゝ論ゝ句のはしめよ居士よりとも
てゝ乞ゝるゝ又叉乃此ハ其趣ゝ戊辰より
ゝゝものゝ十二月をもつゝ稿をる
句ゝの風流の彩ゝと同ゝ志の友ゝ

ちあきんとく著はせるなれを外よこの草の
加はつまもなくはこれ此編者の弗れい
まへ波とハ同人なりやうも此序者の居さま
秋風菴とハ墨人なりやとすと知る人こそ下

即浄居士

一溪法師の豊東乃行を送る詞

四月十三夜竹二一溪こゝ者訪ひおとして彼の
法結ぶと更の錦帳中ゆ辭しく出へさま



なの色はなくす東都をの方ゆ越なんこふとて
あくむるハ詞の餞傳まくほしとも法ひぬうけ
ものくに別さて頻てこうも卧るこ多ゆんるやう
此尊者いつくまても安住しく勅を聞て常
ゆ四方の志あれこそいろへの大とこ達のうへ
ゆくく進ゆ樞すてよ故事なくもう礼と趣向
求むるハ求めるすくなひもうけて

月ゆ出こ死の海乃外をゆけ

との一章をゆくゆ寄こ

考るに句こ紅しくこふも三尹の所作

なぬれバ文字の数乃合ひするごとて幸ひのす
あらめでたしと学強してとらましかバ佛の不
滅似よぶ老たりと説伝るとや據り所とせる
取るも捨るもある者の料理なこゝろ塵俗に
沈める身にしてたゞふみりをとらに不しあふらす
べき揚東りこ不惑ハ元来ある者の守るる審甚
提明鏡の樹に非す臺にあらさるハ兼てある
者の悟入せる所也返すく道心堅固に日返
しこゝろ道行ふかくまうろしあらハつらん
句ばかりひとつ七十五葉のうちハ世にすまつ



翌あらくしかくらむよりて再會を期してかく情を
慰むのみ
六浮の人つるひ生前に日田乃水
文政未ことし

駝岳発句集叙

吾すハ雑話波よハ浜なく勤學翁の高弟
あまく机をそし人にもいつしか蹟なく絶せし
ゆゑをとり駝岳ある人のこゝろこ世を翻よ

なる流の義乃一隅をさとらす風調よく世と
共に推移りて文は廣く其傳燈を掲け
まれては都て祖意に協ひけるへしいよゝ
乙二の五升菴に席をゆつりて道統附
囑のぬし八千坊あり師の生涯の句を採りて
一集を編て七とせの追慕とせんとや是なる
よく継ゐて迷はぬ佳なしもあらされけりと
いとめてたしと舊識なるをもて序の需めに
こたへ四十餘年の因みなれハ七十五歳の
皺手をとりて筆す



文政四年巳三月

三石亭嶂

君か代の幸吉波乃石とよみありける石の數をや
かしこみも三つをゆるしてあゆみける其さきのおもし
けなるをと愛しくらしに方丈のいちゐむすひ
て三石乃名をて呼つゝ童児人なりけりむろ
のおゆきうの錦窓總ハせ川義務設けてされ
勞をと忘れまするはまくとく陰徳のまこころ

よりて更に石を拾ひ好婦を得んとの
こゝろざしなるべし
四面乃眺望四時の変化ハ自序に書されたる通
加之筆なりとも此石ハ起伏こゝにまとり
成さむ望ハ木ハ枝ハ葉ハ花ハ実ハ
こゝろ〳〵枯脂荻琴彩め出て英初平の仙を
学ひて只いつくもこゝ石亭の遊ひこゝろ入や
辛巳仲夏

## 跋

秋風莽莽句集二巻、當伯考中年
寛政丙辰こゝ歳門人金弗水選而
刻之、此編為其後集、俳句一巻、俳
文二巻、今茲文政丁亥、家君與弗
水及藤君来輯之、而上於梓、實
伯考歿こゝ六年也、丙辰こゝ板、今已不

存、蓋伯考不以俳求名、梓行之事、非其素意、刻既成、委諸書肆、各復所問、終至於失亡、極可惜也、然伯考俳句、中年以後、頗変風格、識者稱其老而益進、此編所収、始丙辰、終辛巳、凡二十餘年、則前之所亡、亦不甚惜、至俳文成集、自古希青其

角諸老、而及近時、不過五六家、殊可珍也、嗚乎、古之立言者、必有子弟門人、編集之、考訂之、又隨而鼓吹羽翼之、而後始得傳於遠也、伯考無子、視不肖建、猶子也、然建也以儒為業、不暇学俳、故當其生時、不能員荷其道、歿後亦不能助我父、以任編集考

訂〻勞、其謂之何哉、若金藤二子、可
謂不負本已、夫　伯考之名、噪於俳
林久矣、但隱居放言、不趨時好、故與
都六執牛耳者、不必相合、而年少後
進、務出新意、排擠前輩、以求勝、則
恐此編復蹈丙辰〻轍也、伏願吾〻
君子、存在伯考門者、嘗相識者、不

相識而相慕者、素不相慕、讀此編而
喜之者、相與鼓吹羽翼、而傳之於
數十百年〻外矣、天運巡環、無往
不復、世道一變、則鄉所以為俚、今以
為雅、彼所以為陳、此以為新、此編
雖低於前、必昂於後矣、安知其不
與桃青真角詩壇〻〻並立乎嗚

吟家君老矣、建也不肖、此偏ら存亡
通塞、將在衆君子、故我不自愛我
言ら嘖ら焉云爾、

姪建拜書

一と我ら家聖ふりて舊き跡を尋ね
探ら求めの山ら分て古ら人ら滿
ら球たつきと世柴門ら行ら子ら小
枝ふら枝ふらかくいふ事ら人ら社
多ら仕出ら事ら友ら人の信きら
ある社事ら入々世ら行ら笑ふ指本の

叢書の数三十餘ありて紙
上に伝る一生極楽に至る情願大流
社汀の嘱をうけ信ずべと其名を易
ふるを賞に感ずるに月化師社
文集上木あり世集の託せ称
已に出れて嘱師の文章を彼里人
業を性稽を莫無貫精神憤典の





深深の趣つ史の藻学を探り試
除語学集社深測を寛免以積身を
言葉に流ずる敢学一矣無弱
玉と得金と言箱の己天六あり
天乃国と説法あるなく名
しいられよあるなる者 書称
書と級る者師の法廉者水あり

浅ましき我志ゝさん余が圖書にしむ
叢に集をきゝ篇とゝりし[illegible]を撰む文珠子
崔顥に[illegible]大江の峰に墨を[illegible]西
河の流れ清らなる我揮ひ散らす浮ぶ我
題すといふ　天保四癸巳葉月の日　小自[illegible]人



鶴鴿[illegible]のうへとも上字戴を不得
されし人として[illegible]よく
ことわりしとも會戴を学びしとや
余性僻にして風雅をこのみされど
その身をよう物へのあゝあ
よってのち文化庚午の年と自[illegible]よ
[illegible]十河にたよりて四方の[illegible]を
学ひ句をかね[illegible]雅風を高[illegible]
市[illegible]すまして[illegible]研究[illegible]
遂にまゝ[illegible]の富[illegible]ものゝ

故に其のかきあつめしも志ハ十とせ
あまりの昔よりおこなひ
蒹葭のこゝろなん侍りしうゑし師
すら時々かりの宿りあまた頃
ぬれしを家妹より藤原ぬしなやミ
給へりしの三百首ばかりをえらびて
あまあまハいさゝかにまかせしも也
なりしや又ある時ほかしておこなひて
陸奥のうらハよしやあるとその
浪のまなかへあまの友ち



うけすておもひきや浪華の陽河
おもひをとりこめしも草根生津大人
ちくのまかせなす禄郡の都中比丹講し
あすりとらへ膳月に晦やあら鮮
さりしくらうもちたやつらきかれすて
山の端ちかし日影よりまかせ八
難上方の露をも哉みのよしなにきて
家の子ハいふも更なり有栗久かれしあれ
渋大卿の言の葉をもすゝ屋あまる
まなんさりしと九十の賀とかゝせ

誹諧にもあしき筆道を宗とする事
詠みの風流にまさるへし月をも経て
うちすさみ詠つゝは発句ハ句集となして
筑紫頌母あり或ハ聯句をかへしてもよむ
諸集へ入上ゆかりにしれ其も
歌し携りしてわたりて其の際あるを
空しく嘆きすこしかたなき事乃
兎角をなにかしれを世に弘めん為に
此高言の紀事用ひけりと申す
綴りぬるを扶木寿園と共に秘しぬる



ちかれおもちかやうにや故有乃春
三人おこなふて其の庭にまたよの河あり
と出て紀伊国乃詞を添て名残と
し白楊のあるしと言てをあけふ
家とふかしゝかに思て見しあれ胸
ふさかるをちからにふかん彼鶴也むしも
力をかかりはしめ念されてゐるなし
かくて技をあれ二字をとして此稿
捨し二字に縁の揮人もかけぬ三つ
あれとも先に其名を天選東舎誌

文雅の[illegible]拾集又おくりさま[illegible]
[illegible]の人々[illegible]所の[illegible]
とものきんぬきてこれるおさまるあしし
かくつてさそうる井水高きを
さしをみてうよ重雅と言ふ
鳴ゆりまはしおわさなれとあふらち
言ふをのさりさまを嵌んとるをけ
れのを風雅の中理の中とさへ
示ぬされし固ほをもて志を
進ていうを迎のをを書を拾う



拙をもて序をおくる事を
称ふ

文政癸未仲秋　宜春亭玉果述

友人　朗郁書

東京帝国大学図書

天保十一庚子年九月

豊後日田　秋風菴藏板

浪花書房　心齋橋北久太郎町南　塩屋忠兵衛